

## 金 銭 観 の 研 究

お金の魔力に囚われた人びと

浅 野 純 一

### はじめに

「野村証券を強制捜査」、日本経済新聞は第1面で大きく伝えている(平成9年3月26日)。野村証券が、会社ぐるみで元総会屋に特別利益を供与したという容疑である。その後捜査の進展とともに事件の暗部が白日のもとにさらされてきたが、そこに見られるのは、人の目をくらませ、心を惑わすお金の魔力と人びとの悲劇である。

「経済小説」と呼ばれる小説のジャンルがある。小説の舞台は苛烈な競争を強いられる企業社会であり、そこにはつねに金銭がつきまわっている。小説が人間の生き方を問うものであるとするならば、企業社会における人とお金との関わりを問いかけているのが経済小説といえる。「真実は虚構を通してのみ語られる」とも言われるが、まず、小説という虚の世界の中に、お金をめぐる人間模様を探ってみることとしたい。

### お金の魔力に囚われた人びと(1)

城山三郎「総会屋錦城」

「総会屋錦城」は、直木賞を受賞した城山三郎の出世作とされる。錦城は大洋銀行を寝城とする同銀行の与党的大物総会屋である。作者は、大洋銀行の株主総会をめぐる錦城の動きを通して、ルールもモラルもなく「万事は金さ」という総会屋とそれを取り巻く人びとの姿をえがき出している。

大洋銀行第59回定時株主総会は、大株主扇山富朗一派によって一歩乱起きることが予想されていたが無事に終わった。大洋銀行大村頭取の依頼を受けて、錦城が総会屋の指揮に当たった

からである。その夜、総会無事終了の謝辞を述べに訪れた大村頭取に錦城は言うのである。

「石田弁護士に100万ぐらいやっておくことだ」

石田弁護士は大銀の顧問弁護士である。

「石田君なら50万円謝礼を渡してある」

頭取はせきこんで云った。

「毎月顧問料を8万円ずつ渡してある。その上、どうして、そんな金をやるのだ」

「捨て石だが、生きる石だ」

なおも重ねて錦城は云う。

「顧問弁護士というのは、会社のいろんな資料を握っている。その資料の出しよう如何では、裁判所の判定を変えることもできる。危険な味方だ。分かってるね」

しかし、大村頭取は、このかねを石田弁護士に渡していなかった。捨て石は打たれていなかった。そればかりか石田弁護士には、相手の総会屋扇山側からそれに倍するかねが渡されていた。それで大銀側の内部情報は相手側の知るところとなり、扇山一派は大銀経営内容に不正ありとして臨時株主総会召集を申し入れる。

臨時株主総会を前に、大銀は扇山側の南弁護士の買収にかかる。そして南から入手した内部資料をもとに臨時総会を受けて立つ。大銀側錦城は、鉾先を逆転させ扇山側の担保の差し押さえを動議、混乱のうちに総会は終了するのである。

「万事は金さ、……」錦城の言葉である。

山崎豊子「華麗なる一族」

華麗なる一族とは、都市銀行10位の阪神銀行頭取である万俵大介を中心とする万俵家の人びとのことである。実業家としての万俵大介は、

地方銀行にすぎなかった阪神銀行を都市銀行に発展させ、さらに金融再編成の流れをとらえて、他銀行との合併による業容の拡大をねらっている。しかも下位銀行との合併ではなく、「小が大を呑む」上位行との合併を画策しそれを実現するのである。そこでのかくれた主役は封筒におさめられた「お金」である。そして表に登場するのがお金の魔力に囚われた人びとである。

万俵頭取は、大同銀行の新頭取就任パーティに出席するため東京に出てきている。東京支店の頭取室での東京事務所長芥川常務とのやりとりである。

「頭取、今夜は、永田大蔵大臣とお目にかかれますか？」

「多分、大同銀行の新頭取就任パーティのあと、会えるだろう、美馬が、その段取りをつけてくれているから」

万俵大介は、大蔵省主計局次長である娘婿の美馬を通して大蔵大臣との気脈を通じている。

「では、永田大臣が近く開設される新しい事務所のお祝いには、どれくらい致しましょう？ もちろん、各行が幾らぐらいにするかは打診しておりますが、美馬さんにもご相談したいと思ひながら、なかなか連絡がつかなくて、それに差し上げるからには、例の架空名義の口座に振り込んでおきたいと思ひまして」

「まあ、永田大臣とうちは、なみのつき合いじゃないから、その辺のところは手落ちのないようにしておくことだ」

阪神銀行の頭取室で万俵頭取は、大亀専務にはじめて銀行合併の意向を伝える。驚く専務に万俵は裏金づくりを指示する。

「政官界工作のために、表から出せない裏勘定の献金、その他の金がある、それを大亀君、何とか工面して貰いたいのだ」

大亀専務によって捻出された裏金は、やがて別の面でもその役割を果たすことになる。阪神銀行系列の阪神特殊鋼の倒産をめぐって、大蔵委員会が銀行側の責任を追及することになったからである。

「阪神銀行東京事務所長の芥川は、机の引き出しから行名入りの紙封筒を取り出すと、その中味を改めた。新札の一万円紙幣五・六ミリの束で、はらりと扇を開くような慣れた手つきで新札をひろげると、かすかなインクの匂いと真新しい紙の匂いがする。芥川は二枚ずつ、指先で紙幣を数え、改め終ると、無地の封筒に入れ替えて、ホッチキスで封をし、無造作に上着のポケットに入れた。」

芥川所長が料亭に迎える相手は、大蔵委員の中根代議士である。

「私どもの方は中根先生が頼りなのでから、これでよろしくお取り計らい下さい」

芥川はそう言うなり、上衣の内ポケットから茶色の封筒を中根の前へ押しやった。

「そう、じゃ、まあ預かっておこう。」

中根は照れもせず、封筒を取り上げ、するりと自分のポケットに滑り込ませた。

#### 高杉良「小説巨大証券」

この小説に登場する主人公は日野一、大手証券のひとつ日和証券の法人部第四事業法人部課長である。日野とゼミが同窓の山本繁は最大手の丸野証券から準大手の昭和証券に出向している。二人は恩師を偲ぶ会で顔を合わせた。山本は日野ヒノピンに話しかける。話題は「特別口座」についてである。

山本「なにも政治家に限らんよ。ヒノピンだって、つきあってる会社の社長さんや常務さんの個人アカウントを持たされてるだろう。絶対に損はさせられないから、未公開株の配分なんかでいろいろ配慮してるんじゃないのか。それをやってるから課長の分際で、トップにも会えるんだ」

日野「程度の問題はあるだろうが、通常の経済行為とも言えるよねえ」

3次会のあと立ち寄った山本のマンションで、ブランデー ルイ を飲みながら二人の話は続く。

山本「この程度のブランデーはおまえの家

にだってゴロゴロしてるだろう。丸野で金融法人を担当してたときに、個人ベースでこたま儲けさせてやった財務担当の常務さんから、五十万円の商品券を買ったことがあるが、よく考えてみるとキャッシュとそんなに変わらないんだよなあ。われながら平衡感覚がなくなってるなああってあとで後悔したよ」

日野「どこで線を引くかの問題だろう。なににつけグレーゾーンはあると思うが、ま“ルイ”までがいいところかな。ただし俺の家にはこんな凄いのは一本もないがね」

棚橋常務は日野が信頼する上司である。常務が日野に話しかける。

「未公開株という毒まんじゅうを食ったやつは、あの味が忘れないだろうぜ。CBという鼻ぐすりを嗅がされたやつも、あの匂いは強烈だったはずだ。……あれを出されて買わないやつは人間じゃねえよなあ。神様になりたいやつは断わったかもしれないが、日野だったらどうした。おまえは神様になりたい口か」日野は強く首を左右に振った。「とんでもない。百パーセント受けてますよ。」

これらの話に象徴される証券界の実態を、高杉は次のように記している。

「個人アカウントによる株の売買の利回り保証は違法行為だが、利回り保証に近いことが大手を振ってまかり通ったのは、株の売買で穴をあけても、埋め合せができる新発やCBがあったればこそと言える。」

「事業会社の財務担当常務を3年やれば家が建つ、と言われたのは、証券会社が持ち込むCBと未公開株の余得にあずかれたから

にほかならない。とくに上場直前の新規株や未登録店頭株による売却益のポロサ加減は、金銭感覚を麻痺させてしまうなど凄まじいものだった。」

「新発を事業法人や財務担当者にバラまくことは、ていのいい賄賂にほかならない。証券マンは仲間うちで“毒まんじゅう”という言いかたをしていたが、日野が接した限りでも、“毒まんじゅう”の誘惑をはねつけられる人間は一人として存在しなかった。」

## お金の魔力に囚われた人びと(2)

1991年の金融・証券不祥事

バブル経済の崩壊とともに1991年には、金融・証券界の不祥事が相次いで表面化した。証券会社と暴力団との不透明な取引きの発覚、証券会社による損失補填の問題、銀行・信金では架空預金の問題など、金融機関に対する信用を大きく傷つけることとなった。

暴力団との取引き問題は、野村・日興という大手証券会社が、暴力団の株買占めに手を貸したということである。暴力団稲川会の石井会長が、野村証券と日興証券を通じて東急電鉄株2,800万株も買い占めたことが明らかにされたが、その買い占め資金を両社系列のノンバンクから360億円提供していた。しかもその際野村証券は、東急電鉄株を推奨・集中販売し価格を釣り上げていたことから、買い占めグループと連携していたのではないかと疑惑も取りさたされた事件である。

証券会社による損失補填とは、株価の暴落によって生じた損失の一部について、証券会社が特定の大口顧客に対して穴埋めしたというものである。損失補填は、大企業などから証券会社へ運用を一任するかたちで預けられた営業特金<sup>1)</sup>で損

1) 信託銀行が扱う金融商品のうち、投資家が運用方法を特定した金銭信託を特金(特定金銭信託)という。これに対し、投資家が資金の運用を証券会社に委託するものを営業特金という。委託された証券会社は、自分たちの一存で売買する「一任勘定」に近い形で運用する。ただし「一任勘定」は証券取引法違反である。

失が発生した場合、新規に発行された転換社債や未公開株を購入させ、上場後の値上がり益で穴埋めする、あるいはワラント債（新株引受権付社債）を安く売り高く買い戻すといった形で行われていた。

大手証券や準大手証券17社による損失補填額は1,720億円に及び、一般の個人投資家には損をさせても大口の顧客には損をさせないという、証券会社の体質が厳しい批判にさらされた。

金融機関の架空預金問題は、金融機関の職員が犯罪に加担して預金証書を偽造し、それを受け取った者がノンバンク等に担保として差し入れ、不正に資金を借り入れたというものがある。偽造預金は富士銀行赤坂支店で2,570億円発覚したのをはじめとして、同行神田駅東支店23億円、日比谷支店21億円。さらに協和埼玉銀行80億円、東海銀行630億円と続き、大阪の東洋信金では、同信金の総預金量に匹敵する3,420億円に及び偽造預金証書が作成されていた。東洋信金はこの事件の発覚によって経営難に陥り、他信金に店舗を譲渡、従業員を移管して解体・消滅した。富士銀行の会長、協和埼玉銀行の頭取ら多くの役員が責任を取って辞任した。全国銀行協会では、銀行をめぐる不祥事が相次ぎ、社会的な批判を受けていることから、各行が内部管理の見直しをはじめ業務運営全般について総点検するよう申し合わせた。

#### 1997年の金融・証券不祥事

平成9年3月25日、野村証券は東京地検特捜部と証券取引等監視委員会による強制捜査を受けた。その容疑は、株主総会の円滑な運営に協力してもらった見返りに、総会屋グループの株取引による損失を穴埋めしたということである。また、第一勧業銀行は、この総会屋およびその関係企業に対し、自行とともに系列のノンバンクを迂回する巨額の融資を行い、それが総会屋の活動を資金面から支えることにもなったということである。

97年の証券不祥事は、91年の証券スキャンダ

ルに起因する。総会屋グループ代表小池隆一は、当時すでに第一勧銀からの融資をもとに、野村など四大証券会社の株式を取得し大株主となっていた。92年春、同人は前年の不祥事をめぐる経営責任を追及する質問状を四社に送付、この質問状を6月の株主総会直前に撤回した。その見返りとして両者の深い癒着が始まったとされる。

総会屋に対する証券四社の不正な資金提供は、株やゴルフ会員権取引、系列ノンバンクを利用した迂回融資などの手口によって繰り返された。こうして提供された資金は株取引に充当されたが、そこで生じた損失の補填を各社とも余儀なくされた。明らかにされた損失補填額は野村証券が3億7,000万円、山一証券1億700万円、大和証券3億5,480万円、日興証券2,950万円ということで、証券界を覆うスキャンダルは深刻な問題を提起した。

第一勧銀は、89年に総会屋小池隆一に対して四大証券の株式取得資金として32億円を融資、その後貸出金の返済資金、ゴルフ場への投資資金、さらに証券投資資金など、ノンバンク経由の迂回資金（117億円）と合わせ392億円に及び資金提供を行っていた。このような巨額な融資と不透明な取引がなされていたこと、しかもそれについて組織としてのチェック機能が全く機能していなかったこと、問題の根は深いものと言わざるを得ない。「信用を基盤とし、公共性・健全性を第一に考えなくてはならない銀行経営にとって、痛恨極まりない事態」（第一勧銀1997年年次報告）と言うべきであろう。

金融・証券界をゆるがした不祥事件は、経営中枢部が深く関与した会社ぐるみの犯罪とされた。このためトップを含む多数の経営幹部が逮捕・引責辞任に追い込まれ、経営面に深刻な問題を残すこととなった。

平成9年7月30日、大蔵省は野村証券および第一勧銀に対する行政処分を行った。野村証券については、証券取引法違反（損失補填及び取引一任勘定取引）及び商法違反（総会屋への利益

供与)によるものであり、第一勧銀については、商法違反(総会屋への利益供与)及び銀行法違反(検査の回避)ということである。<sup>2)</sup>

### お金の魔力に囚われた人びと(3)

#### 問題の所在

高杉良は、「経済小説、企業小説の生命はリアリティにある、あり得ない話は書くべきでない」と記している。<sup>3)</sup>「小説巨大証券」で書かれた「あり得る話」が、翌1991年には金融・証券不祥事件として現実のものとなり、虚構(フィクション)は真実(ノンフィクション)のかたちを取ったのである。

企業小説と、現実の企業社会とに相通ずるものは、お金をめぐる人間模様である。お金は便利なものであるとして使われ出してから、その長い間に人びとは、お金に不気味な力のあることを知らされたのである。お金は、現実の社会を変える力を持ち、時には人間の精神や、人間の生き方をすら変えてしまいかねない魔力を持っていたのである。

城山三郎「総会屋錦城」では、銀行の株主総会を舞台に、銀行に巣くっている総会屋はもとより、顧問弁護士までがお金に踊らされている姿がえがかれている。「万事が金さ」というのが総会屋錦城の言葉である。山崎豊子「華麗なる一族」では、他銀行の合併を図る万俣頭取が、その目的達成のために政官界への資金工作を繰り返す。政治家も官僚も、いずれも金包みの虜になってしまうのである。高杉良「小説巨大証券」

では、証券マンと企業との関わりを通して損失補填の問題がとりあげられる。仲間うちで“毒まんじゅう”と称している未公開株などを前にして、その誘惑をはねつけられる人間はまず一人としていない、という実態が語られる。

1991年の金融・証券不祥事のあと、10年を経ずして繰り返された97年の金融・証券不祥事についても、否応なくお金の魔力に囚われた人びとの姿を見るのである。損失補填の問題では、社会の暗部にうごめく総会屋と企業との癒着、収益第一主義で倫理というにはほど遠い企業の姿、問題の根は深いのである。とくに金融機関は、その公共性から信用を基礎とする健全経営が望まれるところであり、信用を傷つけた経営責任は極めて大きいと言わざるを得ない。「信を失えば則ち亡ぶ」と先人は説いている。<sup>4)</sup>

#### バブル経済の残影

日本を代表する大手の銀行・証券会社で、総会屋に絡んだ不祥事件が発生したこと、複数の銀行・信金で巨額の預金証書偽造事件が起きたこと、それは金融機関経営のあり方に問題があったということであり、バブル経済がもたらした後遺症ともいえる。

86年暮から91年春にかけて51ヵ月に及んだバブル景気では、地価や株価の上昇とともに、日本中であり余った資金が乱舞した。その膨張したお金が、人の心や社会を深くむしばんだのである。それまで人びとが持っていた健全な価値観に代わって、拝金主義的な風潮が社会に蔓延していった。世の中のムードは収益拡大、収

2) 大蔵省による野村証券および第一勧銀に対する行政処分の内容。野村証券は株式自己売買業務を年内(5ヵ月)いっぱい、全店での株式業務を一週間、それぞれ停止。第一勧銀は個人向けを除く新規融資開拓を年末まで停止するほか、国内外の営業拠点新設を一年間認めない。証券会社への業務停止命令としては過去最長、都市銀行の国内業務では初めてである。

3) 高杉良「小説巨大証券」あとがき

4) 一瀬桑吉(元第34銀行副頭取)は、銀行および銀行家のあり方について次のように記している。

・銀行は云うまでもなく信用を基礎として立つものにして信用は即ちその生命なり。故に万事如何なる方面に対しても苟も信用を毀損するが如き言動あるべからず。「信を失えば即ち亡ぶ」と云える言は古今東西を通じて不変不動の真理なり。

・銀行家は常に自ら慎み自ら顧みること肝要なり。固より卑屈に流るるの意味にあらず。また沈着の裡に生氣旺盛の気分なかるべからず。

・健全なる銀行は健全なる経営者に待つ。健全なる経営者は之を清浄潔白なる人に待たざるべからず。人は常に公明正大にして俯仰天地に恥じず、白昼坦々たる大道を闊歩すべし。(資料「銀行業務改善隻語」昭和2年)

益優先となり、しかも、不動産価格の高騰や株価の上昇で大きな金額を扱うこととなった金融機関職員の間では、正常な金銭感覚が麻痺してしまった。<sup>5)</sup>

また、バブル経済のもとでは、地上げや債権回収など、銀行・企業と総会屋との接触が増えてきた。こうしていったん総会屋や暴力団とのつながりができてしまうと、あとは食いつぶされて行くばかりである。野村証券が総会屋に対して総額3億7千万円に上る利益の提供を余儀なくされ、第一勧銀も系列のノンバンクとともに総会屋の言いなりに融資を繰り返し、その総額は392億円にも達している。

バブル経済が残した後遺症はまことに大きい。相次いで不祥事が起きた問題の所在は明らかである。いま、企業は収益優先主義を見直し、あるべき企業倫理を問い直し、人びともまた麻痺した金銭観を改め、清潔な金銭感覚を取り戻すことが求められよう。

## おわりに

「金銭というものは、……人間の精神を買う手段に使用出来るのだから恐ろしいではありませんか。即ちそれを振り蒔いて、人間の道義心を買ひ占める、即ちその人の魂を墮落させる道具とするのです。」夏目漱石の言葉である。<sup>6)</sup>

時として人は、自らが生み出したお金の魔力にとりつかれ、身を滅ぼすことになりかねない。97年の春から秋にかけて世間を騒がせ、深い傷跡を残した金融・証券不祥事では多くの人びとが失脚した。恐るべきはお金の魔力である。

### (補記)

山一証券は、「慢性的な業績不振、総会屋への利益供与事件による信用失墜を背景に株価急落で信用不安が高まった結果、金融市場からの資金調達が困難になった」として、自主廃業を決めた(平成9年11月24日)。

また、日興証券および大和証券に対しては、野村証券に続き大蔵省による一部業務の停止を含む行政処分措置がとられた(平成9年12月18日)。

### 参考文献

- 内山節 1997 貨幣の思想史 お金について考えた人びと 新潮社  
 奥村宏 1997 総会屋スキャンダル 野村証券事件の構図 岩波書店  
 佐高信 1983 実と虚のドラマ 経済小説にみる企業と人間 日本経済新聞社  
 塩田潮 1993 大蔵省の不覚 迷走の行政指導 日本経済新聞社  
 週間金融財政事情 関係記事 金融財政事情研究会  
 城山三郎 1980 総会屋錦城 新潮社  
 第一勧業銀行 1997 年次報告書 第一勧業銀行広報部  
 高杉良 1990 小説巨大銀行 講談社  
 高杉良 1997 金融腐蝕列島 角川書店  
 日本経済新聞社編 1991 日経ファイナンス92 日本経済新聞社  
 日本経済新聞 関係記事 日本経済新聞社  
 山崎豊子 1980 華麗なる一族 新潮社

5) 金融制度調査会では、金融不祥事続出の事態に対応する金融界・行政のあり方についての提言を行い、その中で不祥事の原因を次のように記している。

「金融機関は、経営効率化の旗印の下に内部管理部門の人員を抑制し、機械化を急速に推進したが、その反面、審査の充実、リスク管理の徹底、職員の教育・指導面の対応等は遅れがちであった。このように、適切な内部管理を怠ったままに、金融機関が安易な業容拡大と収益の追求に走り、ノルマ主義等の下で職員を預金・融資拡大競争に駆り立て、投機的な土地、株式等の取引のための融資を拡大していったこと等が今回の金融不祥事の原因等となったと考えられる。」(資料「金融システムの安定性・信頼性の確保について」92.1)

6) 夏目漱石「私の個人主義」漱石全集第11巻 P.453